

『昭和天皇実録』に見る丸尾錦作の事績

皇學館大学名誉教授 所 功

凡 例

- 一、宮内庁編『昭和天皇実録』（東京書籍、平成二十七年三月〜同三十一年三月刊、本文十八冊、索引一冊）に見える丸尾錦作関係記事を原文のまま抄出した（二部省略）。記事の主語は裕仁親王Ⅱ昭和天皇であるから原則的に記されていない。
- 二、元号のうち明治は明、大正は大、昭和は昭の略号で示し、文中の（ ）は満年齢や西暦年などの参考注である。誕生日以来も正月から満年齢とする。
- 三、年月日ごとに通し番号を冠し、下に関係事項を略記する。

1 明34年（一九〇一）4月30日（29日、皇孫裕仁親王（誕生）

葉山御用邸御滞在中の皇太子（のち大正天皇22）は・・・東宮侍従丸尾錦作（45）を皇太子御使として葉山より東宮御所（東京高輪）御産所に差し遣わされる。

2 明37年（一九〇四）8月15日（12日裕仁親王御養育に尽力した川村純義（67）死去）皇太子（25）は、（川村伯爵葬儀に）御代拝として東宮侍従丸尾錦作（48）を齋場に遣わされ、玉串を供せられる。

3 明38年（一九〇五）9月26日（同5日、日露講和条約調印）（明治天皇55）

新任の皇孫御養育掛長・・宮中顧問官丸尾錦作（49）に謁を賜い・・・言上を受けられる。これより先、中山（孝麿）東宮大夫は、皇孫御養育掛を設置し、東宮侍従の丸尾を掛長に任ずることを威仁親王（有栖川宮、東宮輔導）に上申ししていた・・・丸尾は明治二十二年（一八八九）以来、皇太子の側近に侍して御教育の任に当たり、明治二十八年よりは東宮侍従として仕え、**皇太子の信任を得る。**

4 同年9月30日上野の帝室博物館付属動物園にお成り）

皇孫御養育掛分課内規が制定され、東宮大夫中山孝麿より皇孫御養育掛長丸尾錦作へ内達される。その内容は以下のとおり。

皇孫御養育掛分課内規

- 一、御養育掛長ハ、東宮大夫ノ監督ヲ受ケ、皇孫御養育ノ責ニ任ジ、皇孫ニ関スル一切ノ事ヲ総理シ、掛員ヲ監督ス。
- 一、御用掛ハ、東宮大夫ノ監督ヲ受ケ、皇孫ニ関スル会計ヲ管理ス。御養育ニ関スル庶務ニ付テハ御養育掛長ノ指揮ヲ受クベシ。
- 一、御相手ハ、皇孫御遊戯等ノ御合手ヲ為ス。（中略）
- 一、侍女取締ハ、御養育掛長ノ指揮ヲ受ケ、御養育ノ事ニ任ジ、兼テ侍女以下ヲ監督ス。
- 一、侍女ハ、御養育掛長・御用掛及侍女取締ノ指揮ヲ受ケ常侍奉仕兼テ供御御服用度品取扱ヲ分掌ス。（中略）
- 一、看護婦ハ、御養育掛長・侍医御用掛及侍女取締ノ指揮ヲ受ケ、主任ノ事務ニ従事ス。
- 一、御養育ノ事ニ任ズル侍女取締ハ、三十歳以上ノ女子ニシテ相当ノ教育アルモノヲ選ビ、之ニ充ツ。
- 一、御相手ハ、華族及宮内高等官ノ子弟ニシテ皇孫ト御同年齢ノ者。

なお、この内規に規定された侍女取締には、翌月丸尾皇孫御養育掛長の口達により渥美千代が任じられる。

- 5 同年10月7日（7月3日、裕仁親王（4）・雍仁親王（3）、水兵形御服で写真撮影）皇太子（26）の御沙汰により、両親王の御写真各一葉を皇孫御用掛長丸尾錦作に賜う。
- 6 同年11月24日（本日より裕仁・雍仁両親王、沼津御用邸に滞在）皇孫御養育掛長丸尾錦作（48）・東宮御用掛桑原鋭（47）・渥美千代（侍女取締）・足立たか（皇孫御養育掛）・清水シゲ（同上）・侍医加藤照麿・侍医局勤務長田重雄等が（沼津御用邸に）供奉する。
- 7 明39年（一九〇六）正月3日（同日、侯爵九条道孝（67）薨去）皇孫御養育掛長丸尾錦作（49）を皇太子妃（父九条道孝）及び九条邸へ遣わされる。
- 8 同年4月27日（3日、丸尾は事務繁忙のため、東宮仮御殿近傍の東宮大夫官舎に移転）満五歳の御誕辰につき・・・皇孫御養育掛長丸尾錦作以下御附高等官の拝賀を・・・お受けになる。（以後、毎年同様）
- 9 同年6月14日（12日青山練兵場で御相手らと教練を御覧）御相手（同齢のお友達）の用いる「此やつ」「ヤイ」「ウン」等の（乱暴な）言葉を御使用につき、皇孫御養育掛長丸尾錦作より、御使用を慎むべき旨の言上を受けられる。
- 10 同年7月14日（10日から葉山御用邸に避暑）この頃、絵本のお話を生まれ・・・皇孫御養育掛長丸尾錦作を始め侍女等を椅子に着席せしめ、雍仁親王（4）と共に交互に、動物の話（絵本「動物の富士登山」「太郎のお手から」などをお聞かせになる）
- 11 同年9月5日（「軍人遺族慰安旅行男子部」の児童が邸前で唱歌奉唱）（日露戦争）遺族についての説明をお聴きになり、何か物を賜いたしとの御言葉を皇孫御養育掛長丸尾錦作に漏らされる。よって（児童）一同に菓子料を下賜され、御用邸の一部拝観をお許しになる。
- 12 同年12月31日（前日、父皇太子（27）戦役の功により功三等金鷄勲章を授けらる）丸尾より将来進学の学校につき質問を受けられ、高等師範学校とお答えになる。
- 13 明40年（一九〇七）正月10日（同日より幼稚園課業を再開）供奉員より日常の御心得・・・を雍仁親王と共にお聞きになる。
一、丸尾（51）はじめ臣下の何か言上（注意）仕る折には、暫く御こらへ遊ばして御聞きに遊ばし給ふ事（以下略）
- 14 同年7月21日（神奈川県ベスト発生のため避暑を葉山から日光に変更）皇孫御養育掛長丸尾錦作・・・等が供奉する・・・日光同田沢御用邸にお入りになる。
- 15 同年10月14日（5日、明治天皇の生母典侍中山慶子（71）逝去）葬送に際しては・・・丸尾を御使として遣わされる。
- 16 同年11月10日（裕仁親王（7）・雍仁親王（6）・宣仁親王（3）お揃いで御両親の東宮御所へお成り）典侍柳原愛子（皇太子生母（52））、皇孫御養育掛長丸尾錦作に御陪食を仰せ付けられる。御両親との御会食に際して臣下の御陪食は、これを初めとする。
- 17 明41年（一九〇八）4月11日（学習院入学、初等科入学式）皇孫御養育掛長丸尾錦作（52）・皇孫御用掛土屋正直が陪席し、四谷の学習院に御到

- 着になる。・・・それより先・・・東宮大夫（木村雅美）は学習院長（乃木希典）と基本方針を協議し、（明治）天皇に左の如く奉答した。
- （第一、第二省略）第三、**受持教員／学習院教授石井国次（34）**を以て之に充つ。同人は高等師範学校卒業・・・学習院に奉職後数年間、初等学科の教授に従事して経験に富み、人質（性格）正直なる者に候。
- 18 同年6月29日（26日、学習院初等科第一学期終了）
 学習院長乃木希典（59）が参殿し、（裕仁）親王（7）の第一学期成績表を皇孫御養育掛長丸尾錦作に提出する。
- 19 同年10月5日（三親王お揃いで青山の東宮御所に参殿）
 皇太子妃（24）及び皇孫御養育掛長丸尾錦作をお相手に**海軍将棋**などをされる。
- 20 同年11月3日（明治天皇（56）の天長節）
 学習院初等科にお成りになり、天長節祝賀式に御参列になる。御帰殿後、皇孫後養育掛長丸尾錦作以下、御附一同の拝賀をお受けになる（以後、毎年同様）。
- 21 明42年（一九〇九）3月6日（三親王お揃いで通学）
 国語の時間に皇孫御養育掛長丸尾錦作（53）より、**水戸光圀**を題材とした訓話をお聞きに
- 22 同年7月14日（7日より三親王お揃いで葉山に避暑）
 御夕晩後、皇孫御養育掛長丸尾錦作より、**掛長など年長者の言に御従順にある（ように）との申し入れ（忠告）をお聞きになる。**／同10日午前、皇孫御養育掛長丸尾錦作より、**時間を大切にすべきことなどの訓辞を・・・お聞きになる。**
- 23 同年10月4日（三親王お揃いで浜離宮にお成り）
 キリギリス・コオロギ等の虫捕りをされ、皇孫御養育掛長丸尾錦作より**名和昆虫研究所「明治二十九年、岐阜市に創立」の様子をお聞きになる。**
- 24 明43年（一九一〇）正月2日（前年12月24日より修善寺に避暑）
 新年につき、皇孫御養育掛長丸尾錦作（54）より出された**御試筆の願いをお聞きになる**、美濃紙に絵筆にて「迪宮裕仁／明治四十三年一月二日」と自書される。
- 25 同年正月8日（菊屋別邸で二年級三学期始業式）
 侍臣一同参列のもと、皇孫御養育掛長丸尾錦作より「**教育勅語**」に関する以下の訓辞をお聞きになる。
- 「・・・抑も教育勅語は（明治）天皇より我臣民に下したまひ・・・陛下が爾臣民と俱に拳々服膺して咸其徳を一にせんことを庶幾ふ、と仰せられし勅語なれば、三殿下（裕仁・雍仁・宣仁三親王）も遵守あらせたまふべきは勿論なり。今其大意を陳ずれば、陛下の皇祖皇祖、此日本国を建設し、代々の臣民、忠孝の大義を重んじ今日の隆盛をなすに至る。故に今日の臣民も、よく忠孝の道を守り、業務を拡張し、益々我国の富強安寧を計れとの勅語なり。
- 今や迪宮（裕仁）殿下は十歳、淳宮（雍仁）殿下は九歳、光宮（宣仁）殿下は六歳に達せられたり。宜しく年齢の多少に従ひ、心身に適応する体育、心身の発達を遂げさせられ、遂には天皇陛下、皇太子殿下の御世も継承したまひ、或は御世を補翼し給ひ、益々我国の国威国光を発揮したまはんことを冀ふ。此席に陪する不肖錦作を始め、男女の侍臣は皆三殿下の御体育・御心育に必要な機関なれば、各自各機関の運転をあやま

- らず、誠心誠意其職務の功頭を著大にすべし。三殿下には、其侍臣の運用を錯誤せず、其職責のある処を尽さしめ給はらば、三殿下の御体力・御智徳の御発揚は光大無量にして世界に光被するに至らん。不肖錦作、一言を陳べ本日の始業の式に代ふ。」
- 26 同年正月10日(塔の峰の富士見台にお成り)
連日の如く「**世界一周双六**」をお楽しみになり……この日、皇孫御養育掛長丸尾錦作……もお相手をなす。ついで御産所前の庭において、「**世界漫遊遊び**」をされる。
- 27 同年2月11日(1月16日より沼津御用邸西附属邸へ移転)
御拝の間において紀元節御式に臨まれ……皇孫御養育掛長丸尾錦作の祝辞をお聞きになり、「君が代」「紀元節」を参列供奉員と合唱される……。…(三親王)本邸へお成りになり、(昭憲)皇后(71)に祝詞を言上され……「紀元節」の唱歌を披露される。
- 28 同年8月21日(7月30日より葉山御用邸に移転)
(葉山)森戸の細川侯爵別邸……においてお過ごしになり、皇孫御養育掛長丸尾錦作より、「**前九年・後二年の役**」の小話をお聞きになる。また、掛長・侍女等をお相手に将棋をされる。
- 29 同年9月7日(前日、三崎町油壺の東大附属臨海実験所にお成り)
皇孫御養育掛長丸尾錦作の進言を受けられ、「あぶらつばに遊ぶ」と題する作文を綴られる。また『日本有用魚介藻類図説』を御覧になり、同実験所において御覧なられた魚類の図をお示しになる。
- 30 同年10月20日(9月28日、葉山より皇孫仮御殿へ帰還)
後夕餐後、運動場において皇孫御養育掛長丸尾錦作をお相手に、初めて御弓(楊弓)を御稽古になる。
- 31 同年12月21日(前日、第三年級第二学期の授業終了)
皇孫御養育掛長丸尾錦作の紹介にて、昆虫標本献上の打ち合わせのため参殿の名和昆虫研究所所長名和靖(雑誌『昆虫世界』主宰者)に御会釈を賜る。
- 32 明44年(一九一一)正月9日(前年12月22日より熱海に避寒)
御学問始めの式に臨まれ……皇孫御養育掛長丸尾錦作(55)により『大学』の一節「**以修身為本**」(身を修むるを以て本と為す)の講話をお聞きになる。
- 33 同年3月17日(この前後、三親王で「擬戦」などされる)
御夕餐後、皇孫御養育掛長丸尾錦作より、御成長に伴い、御行儀にも注意されるべきこと、御出入・御食事などの際の御行儀のことなど、種々訓誡をお聞きになる。
- 34 同年4月11日(学習院第四年級の始業式に参列)
午後、皇孫御養育掛長丸尾錦作を始め御養育関係者による会議が行われ、以下の要項(全項省略)が議決される。
- 35 同年7月11日(5日、第四年級第一学期終業)
皇孫御養育掛丸尾錦作は東宮御所へ参殿し、皇太子(32)に三親王の御学業成績を言上する。
- 36 明45年(一九一二)3月25日(23日、四年級第三学期終業)
静岡への御出発の前に、皇孫御養育掛長丸尾錦作より、本日のお成りに関する御態度・御言語について御注意願いたきこと、及び近時の御行状について注意されるべきことにつき、言上を受けられる。

- 37 同年4月2日(学習院本院で乃木希典院長から御進級の言上あり)
- 皇孫御養育掛長丸尾錦作は、天皇(60)へ御進級の旨を奏上のため参内する。
- 38 同年7月30日(前日午後十時四十三分、天皇崩御、二時間後として公表)
- (皇太子)嘉仁親王(27)踐祚、「大正」と改元される。裕仁親王は皇太子となる。
- ・皇孫御養育掛長丸尾錦作に対し「皇孫御養育掛長」として東宮職御用掛を仰せ付けられたる旨・宮内大臣(渡辺千秋)口達あり。
- 39 大元年(一九一二)9月14日(前夜、青山練兵場で明治天皇の大喪儀)
- 昨夜靈輜宮城を發する頃、軍事参議官兼学習院長陸軍大将伯爵乃木希典(63)は、自邸において夫人静子(53)と共に自刃する。この日午前、皇孫御養育掛長丸尾錦作より、乃木自刃の旨、並びに辞世(遺詠)などをお聞きになり、御落涙になる。
- 40 同年12月24日(翌日より初等学科は冬期休業)
- 丸尾掛長より、皇太子となられたことにより、近く雍仁親王・宣仁親王とは御殿を別とされ、御避寒も両親王とは別地でお過ごしになる旨、内々の言上を受けられる。
- 41 同2年(一九一三)正月8日(第三学期始業式)
- 雍仁親王(二)・宣仁親王(七)の御使として参邸の皇孫御養育掛丸尾錦作(57)に謁を賜い、両親王の手紙を(皇太子(12)が)受け取られる。愆9日には、両親王への御返書及び熱海文庫の手文庫等を丸尾に託される。3月3日、熱海より参邸の皇孫御養育掛長丸尾錦作に謁を賜い、雍仁親王・宣仁親王からの手紙及び贈り物をお受けになる。
- 翌朝、再び丸尾に謁を賜い、両親王への返礼として久能山の絵葉書、自ら撮影された写真等を託される。
- 42 同年4月2日(3月28日より京都市行啓)
- 午後はまず嵯峨村の大覚寺にお成りになる。御冠の間において皇孫御養育掛長丸尾錦作より、南北朝和睦の話をお聞きになり、庭園宸殿前に稚松をお手植えになる。
- 43 同年4月13日(9日「皇孫附職員官制」公布)
- 皇孫御養育掛長兼東宮職御用掛丸尾錦作が皇孫御養育官長に、東宮主事桑野鋭・が皇孫御養育官に転任し、謁を賜う。
- 44 同年9月14日(皇太子御殿の運動場開き)
- 皇太子は、皇孫御養育官長丸尾錦作と共に運動器械の上より紅白餅をお撒きになる。
- 45 大3年(一九一四)正月9日(前年12月26日より熱海に避寒)
- 皇孫御養育官長丸尾錦作(55)、雍仁親王(12)、宣仁親王(8)の御使として参邸につき、謁を賜い、両親王よりの手紙及び庭球道具の披露を受けられる。皇太子(13)よりは樟製手文庫・同硯箱等を両親王へお贈りになる。
- 46 同年正月26日(25日、丸尾錦作夫人鍵子死去)
- 皇孫御養育官長丸尾錦作夫人鍵子・かねて皇孫御殿に奉仕の廉をもって菓子料を下賜される。
- 47 同年4月11日(午前二時十分、(昭憲)皇太后崩御)
- 午後、雍仁親王・宣仁親王の御使として、皇孫御養育官長丸尾錦作参殿につき謁を賜う。
- 48 大4年(一九一五)4月5日(2日、学習院初等科卒業式)
- 皇孫御養育官長丸尾錦作「元皇孫御養育掛長」は休職を仰せ付けられ、第二高等学校長三好愛吉が皇孫御養育官長に任じられる。丸尾御礼言上のため参殿につき、謁を賜う。



丸尾錦作先生之顕彰碑

岐阜市の産んだ偉大な教育者丸尾錦作先生は、安政3年4月24日、加納藩士の家に産まれた。父は広重、母は時子、幼くして学問を好み、漢学詩文を究め、成績は抜群であった。大垣市にあった師範研習学校から東京高等師範学校に学び首席で卒業、認められて学習院の教授となった。東宮御用掛と拝命し、大正天皇の学問の師として大任を果し、更に東宮侍従となり、後明治38年宮中顧問官と拝命すると共に、皇孫、今上天皇（昭和天皇）、秩父宮、高松宮の三殿下のふ育官長とも拝命した。大正4年正三位に叙せられ、大正14年5月5日、70歳をもって薨去された。

明治百年を記念し郷党有志相回り、これを建立した。

(題字(書)松尾吾策 詩文(作)奥村保 碑文(書)横山勉太郎 原石(8帖)青木一雄 デザイン 藤井康司 彫刻 近藤武夫)

※以後、宮中顧問官として、参殿拝謁・御談話、旧奉仕者御陪食の記事すべて省略。
大14年（一九二五）4月24日

宮中顧問官丸尾錦作病気につき、皇太子（24）・同妃（22）より御尋としてスリーブを下賜される。

50 同年5月5日

この日、宮中顧問官正三位勳二等丸尾錦作（69）が死去する。丸尾は、明治二十二年（一八八九）より学習院教授兼明宮（嘉仁親王Ⅱ大正天皇）御用掛として、天皇御幼少時の御教育の任に当たり、ついで東宮侍従となる。同三十八年（一九〇五）より皇孫御養育掛長として、当時皇孫たる裕仁親王（昭和天皇）及び雍仁親王（秩父宮）・宣仁親王（高松宮）の傅育に任じ、大正二年より四年までは皇子傅育官長として雍仁・宣仁両親王の養育に当たる。丸尾の死去に対し、皇太子・同妃より、祭資・色花を賜う。

（令和七年二月七日抄録）

※ 昭和四十四年（一九六九）郷里岐阜市加納に建立された顕彰碑の全文は左の通りである。